

当報告の内容は著者の著作物です。

フィールド言語学ワークショップシリーズ・2011 年度第 1 回テクニカルワークショップ

Praat を用いた音響音声学的分析の初歩

開催日時：平成 23 年 7 月 23 日（土曜日）午前 11 時～午後 5 時

開催場所：AA 研 3 階マルチメディア会議室（306 室）

講師：青井隼人（東京外国語大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）

ワークショップ概要：

本ワークショップでは、東京外国語大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員の青井隼人氏を講師に迎え、音響音声学的分析のためのソフトウェア Praat を使いながら、音響音声学における初歩的な諸概念を学んだ。受講者は学部 4 年生からポスドク研究員までを含む 18 名であった。プログラムは以下のとおりである。

1. 導入（音響音声学によりできること、本ワークショップ全体の流れ）
2. 波形の観察
3. フォルマントの分析
4. スペクトログラムの観察

受講者は、まず音響音声学により言語音声の分析をどのように行うことが可能かについて、概略的な知識を得た後、波形の観察、フォルマントの分析、スペクトログラムの観察の順に、サンプルの音声ファイルを読み込んでデータを見ながら講師の解説を聞くという形で、分析の方法を実践的に学んだ。プログラム最後には練習問題として、波形のみから実際に発音された音声进行分析するという練習問題に取り組んだ。

受講者からの感想：

ワークショップ終了後、受講者から次のような感想が寄せられた。

ワークショップに参加して良かった点

- これから Praat を研究に使ってみようという気になった。初心者だったので、はじめから教えてもらい、分かりやすかった。
- 自力で習得するにはどこから手をつければよいのかという状態だったので、ワークショッ

プでは先生の説明がわかりやすい上に順序立ててサンプルの音声の分析をさせてもらえて、スムーズに頭に入った気がします。

- 当初は Praat の使い方を学ぶものと考えていたが、音声波形の読み取りの基礎を学ぶことができたのは今後自分が Praat を使う上で有意義だったと思う。
- 音響音声学の基礎について勉強できてよかったです。講師の方の解説と進め方は上手でした。無理なく勉強することができました。スペクトログラムが解析できたときがうれしかったです。
- Praat を立ち上げるところから教えていただいたので、抵抗なく取り組むことができた。最後の練習問題で、自分が少しできるようになった実感を持てた。
- なんとなくしか使い方が分からなかった Praat の使い方が少し分かるようになった。波形とスペクトログラムの見方が少し分かるようになった。
- 自分では手を出せないであろう音響音声学のソフトを説明を受けながら使うことにより、絶対使用できないという固定観念をぬぐうことが出来た。
- 基礎的な用語の説明から順に解説があったので、ついていけなくなることがなかった。
- 細かい操作方法まで教えていただいて、やっと地に足つけて(?)分析できるなという感じでした。今後の卒論執筆などに大いに活かしていけると思います。
- Praat の使い方以前に、このソフトで何ができるのかという部分も知らなかったので、イントロがとても分かりやすく勉強になった。また、この講習会で扱う内容についてもイントロできちんと説明があったので、講習の内容もスムーズに理解できた。全員が同じサンプルファイルを用いて、一齐に、実際に動かしてみても習得できたという点がワークショップとしてとてもよかったのではないかと思います。講習を受ける時間と、休憩時間とが、集中力の点でも体調的にもちょうど良いと感じた。
- praat の具体的な使用方法を目の前で見せていただき、調音音声学の非常によい基礎を作っていたいただきました。

ワークショップで改善すべき点

- スクリーンがプロジェクタの光を反射して眩しかった。
- 一番後ろの席からはスクリーンが見づらかった。
- 1 回の講義をもう少し長くしてもいいかなと思いました。休み時間をもう少し短くしてもいいかなと思います。
- 休憩時間をいつどのくらい挟むかということなど、あらかじめ知らせていただけたら良かったかなと思います。
- テキストを見ながら自分自身で復習をすれば良い問題なのですが、講習会の最後に、主要

な音の波形及びスペクトログラムのサンプルを一覧表のような形で (pa, ba, ta, da... など、例えば両唇破裂音、両唇歯茎音.. など IPA の表に沿うような形で) いただけたら、講習会後に一人で復習する際に便利だなと欲が出てしまいました。(それぞれの音の特徴を全て頭にいれておくのが難しかったので)

- 会場の空調が少々暑かったように思われた。

また、今後このような音響音声学に関わるワークショップを行う場合には、今回は扱わなかったピッチおよびインテンシティの分析法についてもとりあげてほしいという声が、多くの参加者から寄せられた。

報告書作成：長崎郁（AA 研特任研究員）